

ばく

と

かたつむり

さく： たつた  
之： きむろみ





ある星のあかるい夜の事です。

おなかをすかせたバクがあるいていると、どこかから黒いもくもくが流れてきました。  
ふしぎなことに、この黒いもくもくはふわふわういていましたが、  
とてもねっとりしていて、そしてすごくいいにおいがしました。  
バクはしばらくにおいをかいでみてから、ぱくりとひとくち食べてみました。

すごくおいしい！

この黒いもくもくは、バクのだいこうぶつ、だれかのわるい夢だったのです。  
ですから、こんなにたくさん黒いもくもくがあるということは、  
どこかでだれかが、とてもたくさんのわるい夢をみているということなのです。

バクはとてもはらぺこだったので、黒いもくもくをもぐもぐたべながら、  
だれがわるい夢を見ているのかさがしました。  
このバクは、これまでずっとこうやってだれかのわるい夢をさがしながら、  
ひとりたびをしていたのです。

バクは、やっとみつけたわるい夢をぱくぱくたべながら、  
道のよこにひろがるキャベツ畑に入っていました。  
ごろごろころがっているキャベツをじょうずによけて歩いていくと、  
ついに黒いもくもくが大きなキャベツから出てきているを見つけました。

さいしょはキャベツがわるい夢をみているのかと思いましたが、どうやらちがうようです。  
バクは黒いもくもくのかたまりをごくんとのみこみながら、キャベツをのぞきこみました。

すると、キャベツの葉っぱのかけで、  
1ぴきのかたつむりがしくしく泣きながらねていました。  
どうやらわるい夢をみていたのはこのかたつむりのようです。



かたつむりのからの中から、黒いもくもくがむくむくとわき出てきています。  
バクはえんりょせずに、かたつむりのわるい夢をどんどんたべました。  
でも、バクがたべてもたべても黒いもくもくはへりません。

かわいそうなかたつむりは、夜の間ずっと、  
からの中にとじこもって、わるい夢を見つづけていたのです。

バクはとうとうおなかいっぱいになってしまいました。

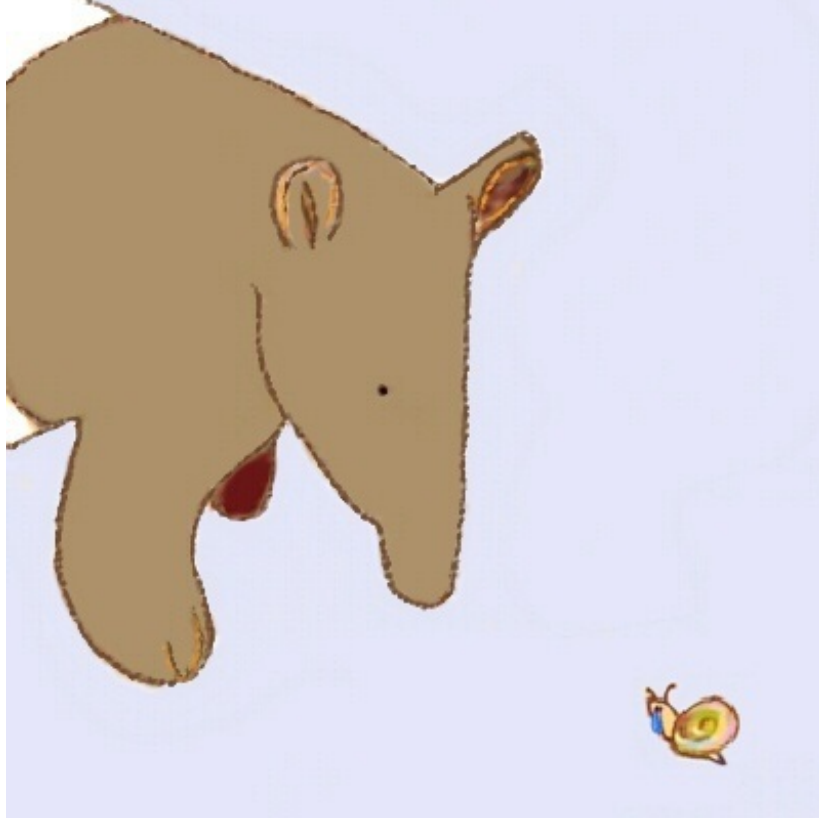
それでもかたつむりはわるい夢からめざめません。

バクはこまってしまいました。

そして、まだぼろぼろなみだをこぼしながらねむっているかたつむりを、

こつんとけて起こしました。

かたつむりはちよつとこころこころがってから、そつとからの中から顔をだしました。



「こんばんは、かたつむり。どうしてそんなにわるい夢ばかりみているの？」

「こんばんは、バクさん。どうしてだかわたしにもわかりません」

かたつむりはちいさな声でこたえました。

「なんだかとてもかなしくってつらいんです。生まれてからずっと。

おしゃべりしたり、ごはんをいっしょにたべたりするあいてがないとか。

歩くのがとってもおそいとか。

いつ死んでしまうかわからないとか。

げんいんはたくさんあるみたいですが、どれもぴったりこない気がします。

いろいろかんがえはじめると、こわくてなかなかねむれません。

やっとねむれたとしても、わるい夢ばかりみます。

お星さまのひかりさえさみしいです」

バクは夜空をみあげてみましたが、  
星はきらきらとうつくしくひかるばかりで、  
かたつむりの言っていることはさっぱりわかりませんでした。

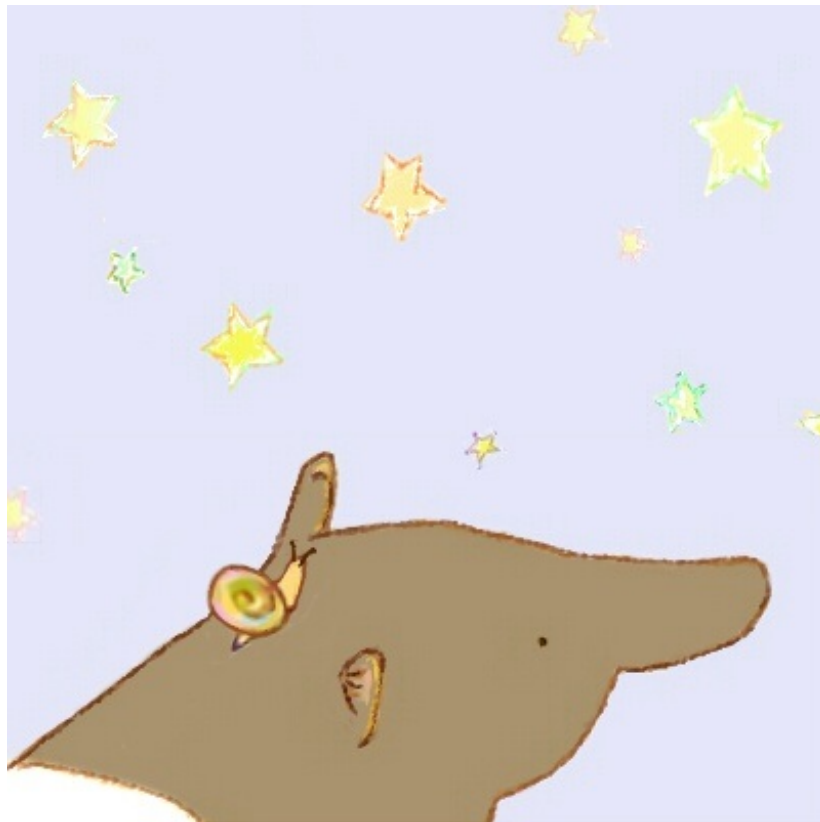
「きみの言うことはぼくにはよくわからないよ」

バクはしょうじきに言いました。

「でも、もうちょっとしたらわかるかもしれない。

もうちょっと、いっしょにいてもいいかなあ」

かたつむりはおどろいたようでしたが、ちいさな声で「もちろんです」といいました。  
そこで、バクはキャベツのとなりにすわりこみ、2ひきはならんで夜空をみあげました。



星はあいかわらずかがやきながら、ゆっくりとうごいていきました。  
バクがたいくつして話しかけると、かたつむりはちいさな声でへんじしました。

かたつむりはもの知りでした。

バクはかたつむりとしゃべるのがとても楽しかったのですが、  
おなかがいっぱいにつかれていたので、そのうちねむりこんでしまいました。

そしてはっきりとおぼえていないけれど、夢をみたようでした。

これはとてもめずらしいことでした。

ほかのひとのわるい夢をたべるバクは、いつもじぶんでは夢をみないからです。

「バクさん、バクさん」

ちいさな声によばれて目をさましたバクは、  
なんだかくらくくてつめたいばしょにずっとひとりでいたような気がしました。

でも、ほんとうはまったくそんなことはなく、  
あたたかなお日さまがバクをぽかぽかとあたためていました。

もうおひるになっていたのです。

バクは起きあがると、あおぞらを見あげて、  
それからいちめんのキャベツ畑をみまわしました。

そして、バクをおこすために、  
バクの耳のそばのキャベツの葉っぱのうえにでてきたかたつむりをみまわしました。

かたつむりはとてもちいさくて、そしてやっぱりかなしそうでした。

さっきまでのわるい夢は、かたつむりのわるい夢だったんだらうかとバクは思いました。

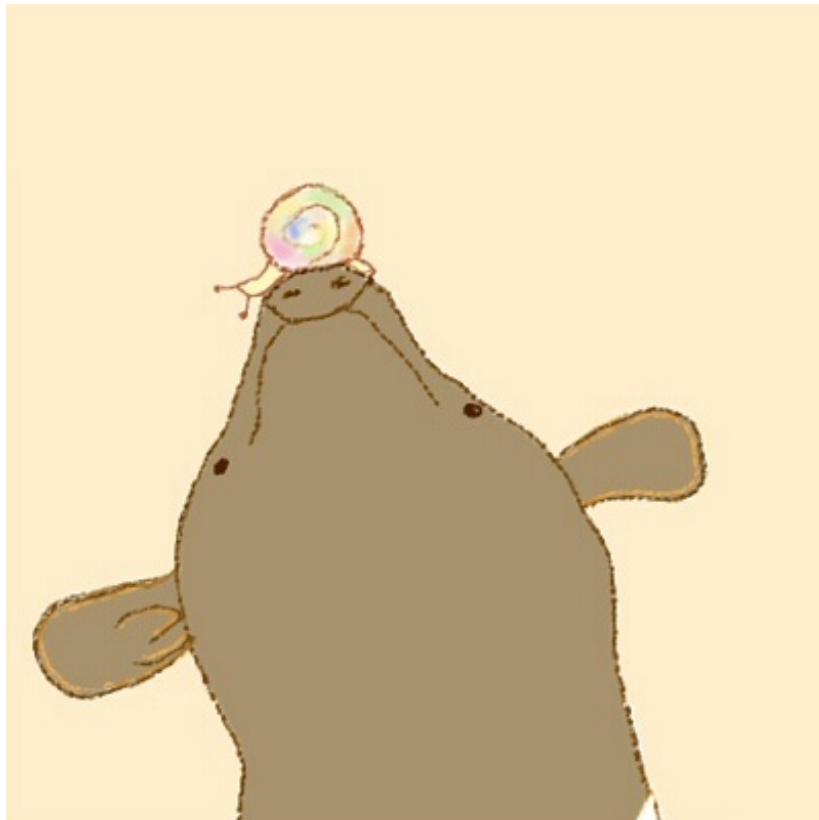
「やっぱりぼくにはきみの言ったことがよくわからなかったよ。

でも、なんでかわからないけれど、

きみの かなしいこと つらいこと

ぜんぶわかってあげられたらなああって思うよ」

それから、バクはおそろおそろ言いました。

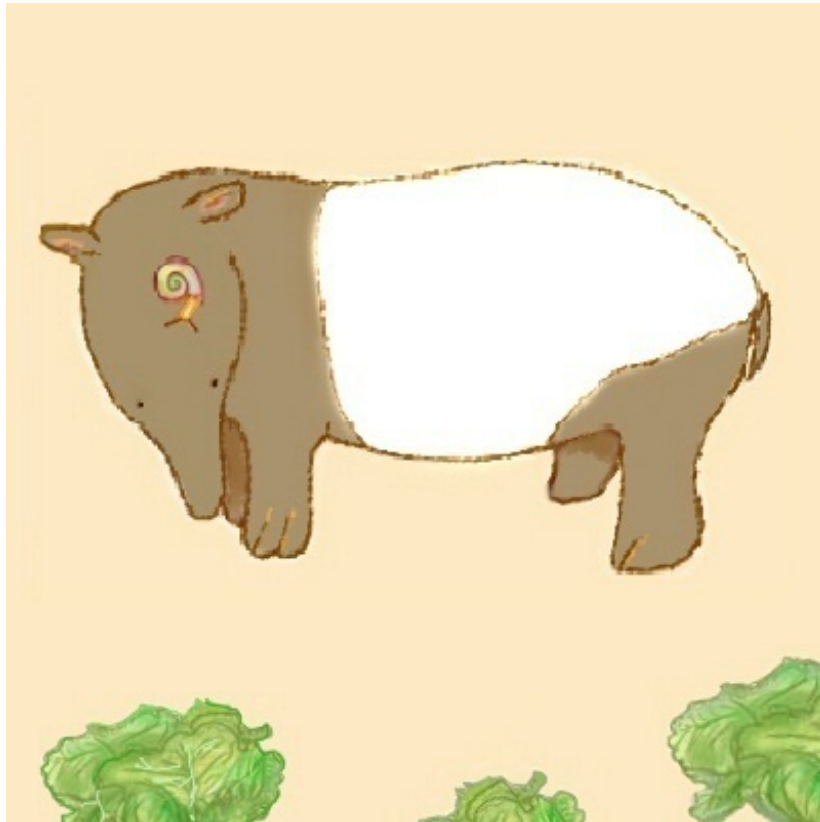


「だからぼくといっしょにこない？  
きみが歩くのがおそくても  
ぼくがのりものになってあげるし、  
ぼくはきみと話してておもしろかったよ。」

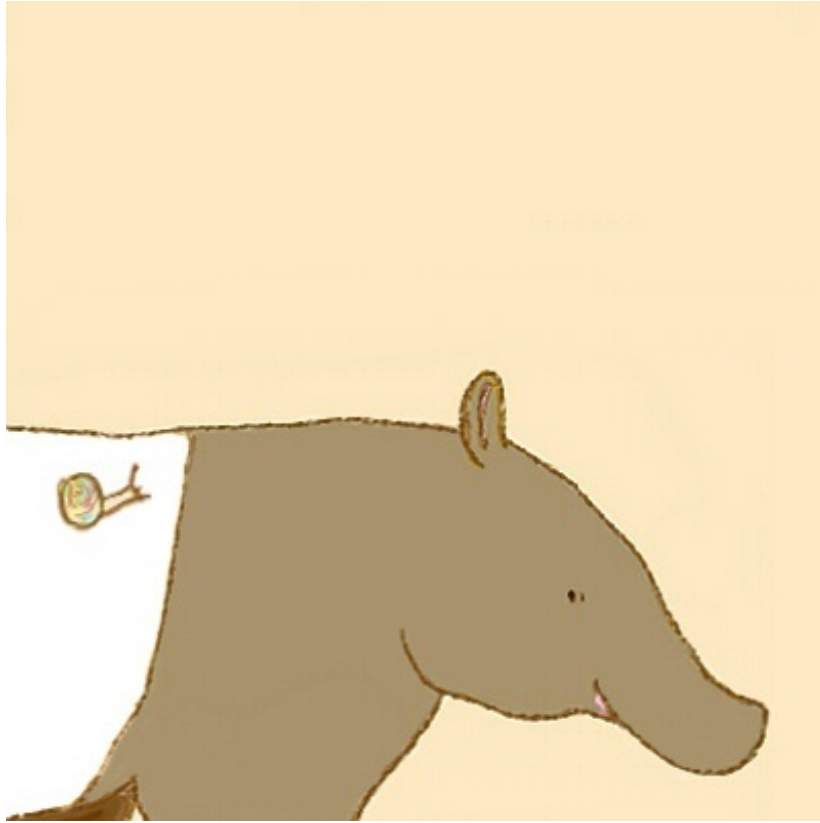
ぼくたちはたべるものがちがうから、  
いっしょにごはんはたべられないかもしれないけれど、  
きみがわるい夢をみたときは、ぼくがいつでもたべてあげる」

かたつむりはとてもおどろいて、からの中にもぐりこんでしまいました。  
でも、バクがしばらくまっていると、かたつむりはそろそろとでてきました。  
そしてさっきよりもっとちいさな声で「ぜひおねがいします」とこたえました。

そこでバクがキャベツの葉っぱに頭をちかづけると、  
かたつむりはゆっくりとキャベツからバクにのりうつりました。



こうして2ひきはいっしょにでかけました。



バクはかたつむりをのせていろいろなところにいきました。  
かたつむりはバクの耳のそばでいろいろなことを教えてくれました。

かたつむりの話はむずかしいこともおあったのですが、  
やくにたつことばかりでした。

バクはかたつむりの話を聞くのがたのしみでした。

2ひきはたくさんおしゃべりしましたが、  
バクはかたつむりがなぜそんなにかなしいのかわからないままでした。

けれど、かたつむりがわるい夢をみると、バクはせっせとそれをたべました。

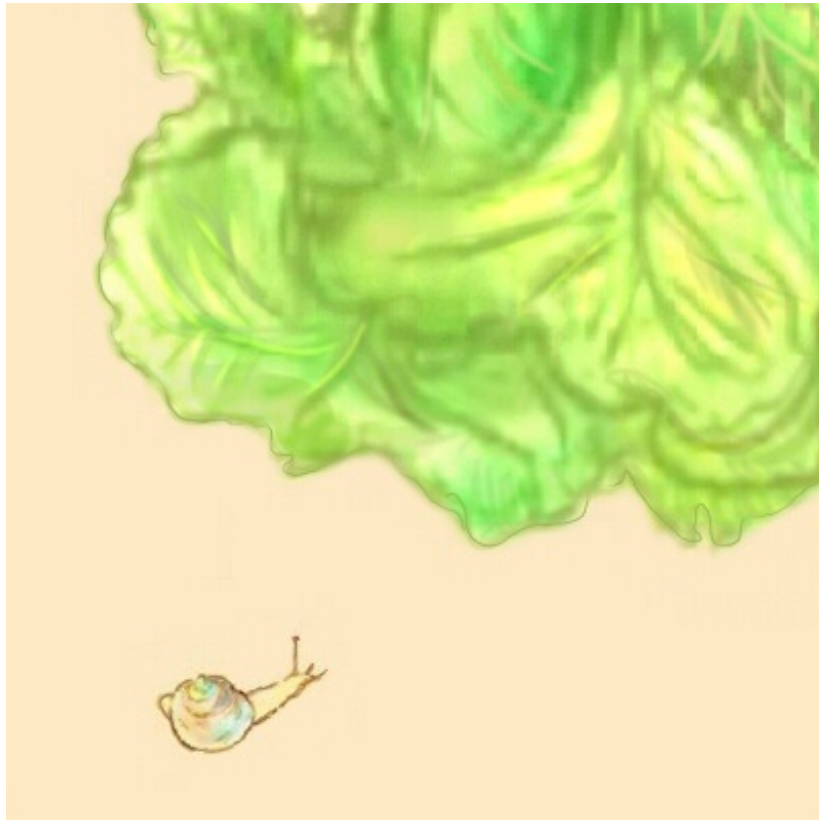


ずっとたびをつづけて、  
ずいぶん遠いところまでやってきたある日、  
バクとかたつむりはべつのキャベツ畑のよこをとおりかかりました。

「バクさん、これまでありがとうございました。  
ちょっとここでやすみませんか」

かたつむりはあいかわらずちいさな声で言いました。

「しばらくひとりになりたいんです」  
かたつむりがそんなことをいうのは、はじめてでした。  
バクはかたつむりをいちばんあおあおとしてりっぱなキャベツの上におろしてやりました。



「ほんとうにありがとう」

かたつむりは、いつもよりちいさな声でそう言うと、  
キャベツの葉っぱの上をゆっくりとはっていきました。



バクはしばらくちょうちょをおいかけてりして遊んでいました。  
あいまに、かたつむりのようすをときどき見にきましたか、  
かたつむりはずっとからの中でやすんでいるようでした。

つかれてねむっているのだろうとバクはそっとしておきましたが、  
かたつむりがわるい夢をみないなんて、ほんとうにめずらしいとも思いました。

とうとうゆうがたになったので、  
バクはかたつむりをおこそうとしましたが、  
かたつむりはへんじをしませんでした。

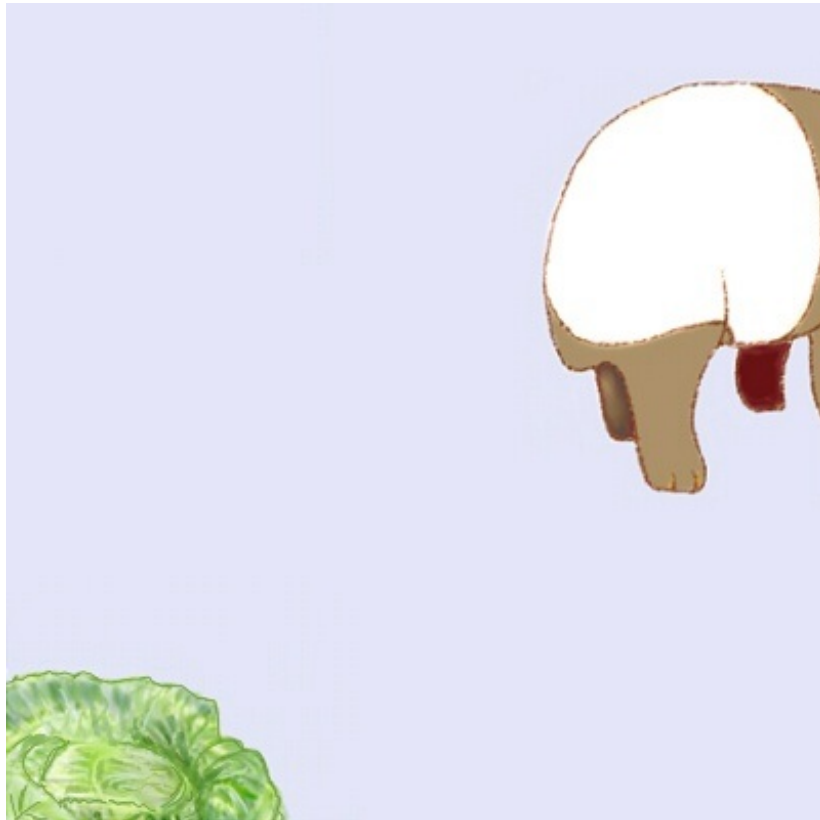
これまでいつもたべていたかたつむりのわるい夢がないので、  
おなかのすいたバクはほかのわるい夢をさがしにいかなくてはなりませんでした。

バクは夜があけてからキャベツ畑にもどりましたが、  
かたつむりはまだからの中にとじこもっていました。

それからバクはしんぼうづよく何日も待ちました。  
しかし、かたつむりはバクがいくら呼んでもでてきませんでした。

ついにバクは、かたつむりのからをそっとひっくり返してみました。  
すると、それはからっぽでした。

かたつむりも、かたつむりのかなしみも  
どこにいつてしまったのか、  
バクにはわかりませんでした。



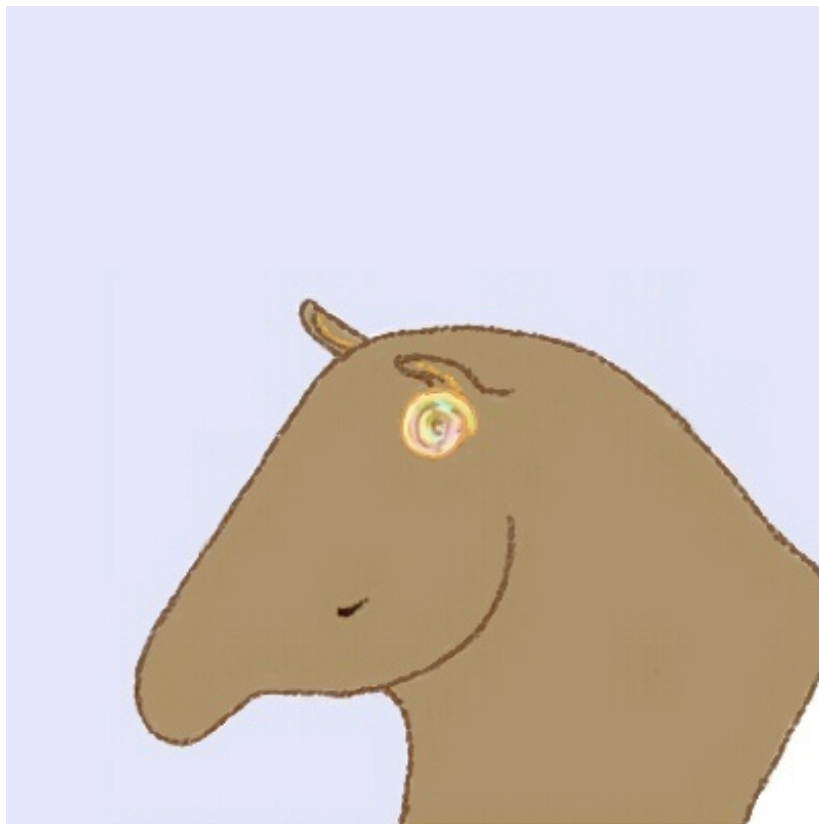
バクはかたつむりのからをそっともちあげると、キャベツ畑をあとにしました。

バクはまたひとりでたびをつづけました。

でも、ときどき、かたつむりが戻ってきていないかと、  
からの中をのぞきこみました。

かたつむりはいませんでした。  
それからまた、バクはかたつむりの声が聞こえないかと、  
からを耳にあててみました。

かたつむりの声は聞こえませんでした。  
しかも、ある日、かたつむりのからはバクの耳にすっぽりはまりこんでしまいました。

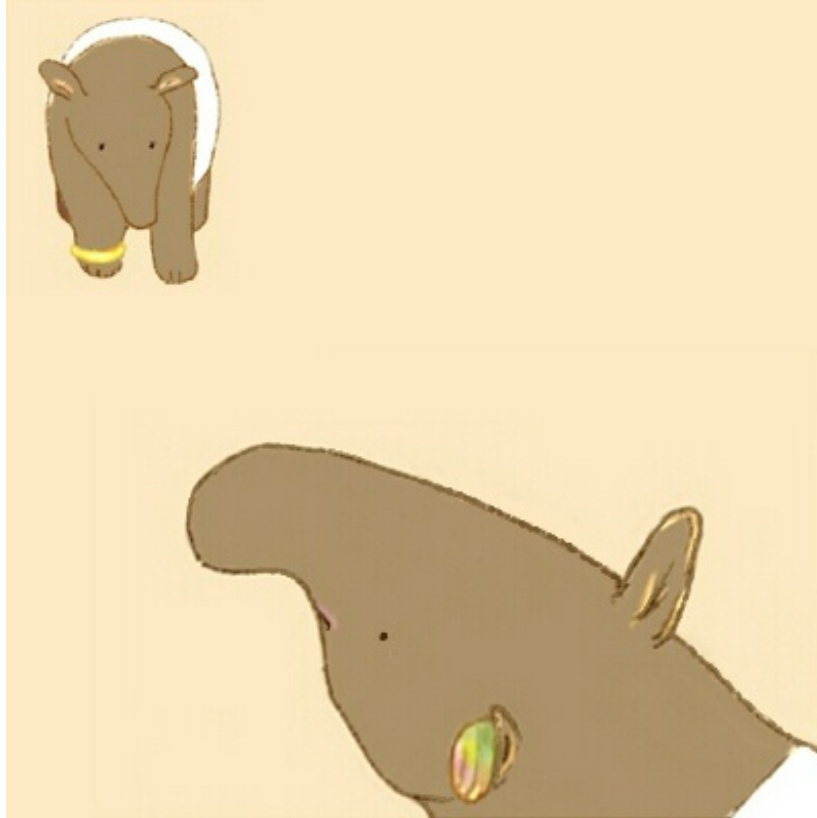


バクはとてこまりましたが、なにをやっても耳からからをとりだすことができません。

バクはつかれはててねむってしまいました。  
そして、ひさしぶりに夢をみました。  
「ねえ、おきて」

バクはやさしく呼ばれて目がさめました。

おきたバクはまっさきにかたつむりをさがしました。  
でも、バクのめのまえにいたのは、小さなかたつむりではなく、  
バクと同じぐらいの大きさのバクのおんなのこでした。



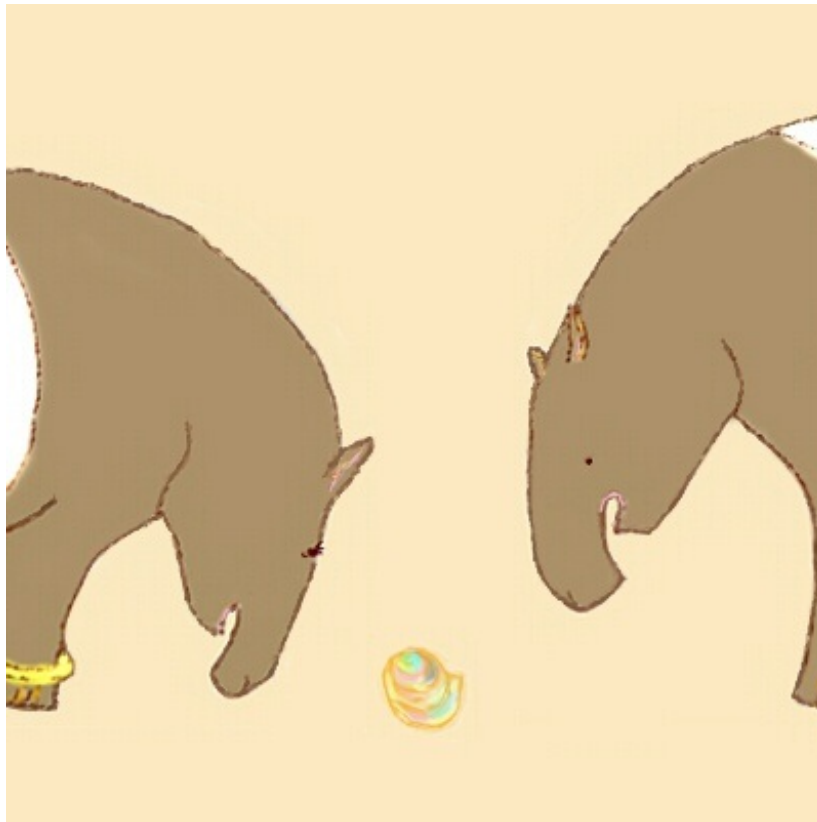
「ごめんなさい。おなかいっぱい、あなたのわるい夢をたべられないの」  
バクのおんなのこはバクにあやまりました。

「あなたは どうしてそんなにわるい夢ばかりみているの？」

「耳にものがつまっちゃって、いたいんだ」

バクがこたえと、バクのおんなのこはバクの耳をのぞきこみました。

そして、じょうずにバクの耳からかたつむりのからをとりだしてくれました。



「どうしてあなたはこんなものを耳につめていたの？」

バクのおんなのこは、かたつむりのからをみてふしぎそうにききました。

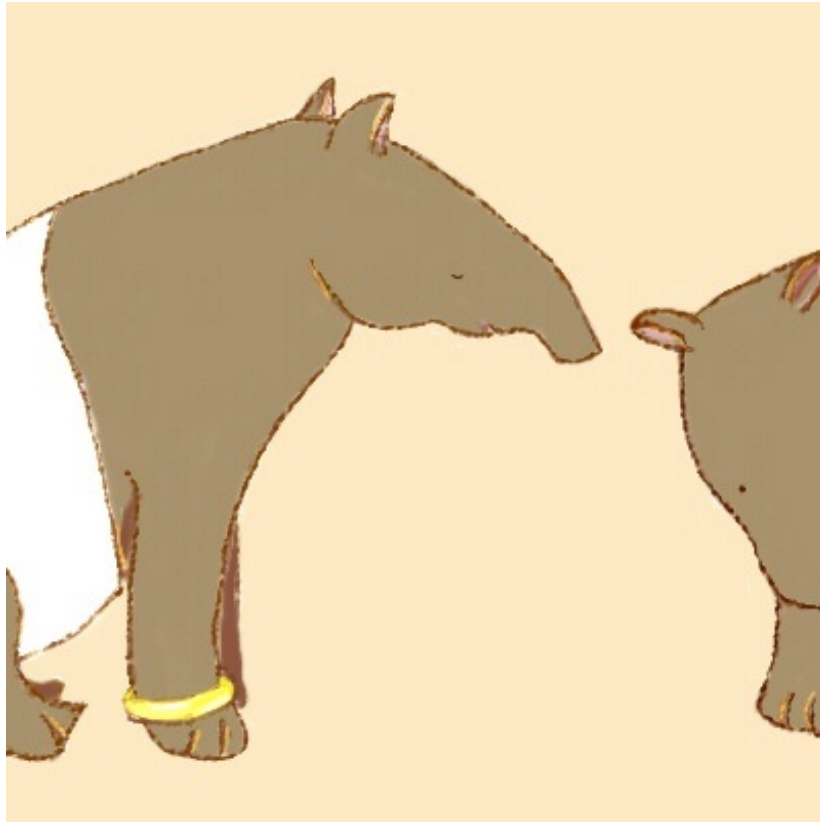
「これは、ぼくのともだちのかたつむりのからなんだ」

バクはそう言って、バクのおんなのこにかたつむりのはなしをしました。

それからためいきをついて言いました。

「ぼくは、けっきょくさいごまで、  
かたつむりがどうしてあんなにかなしかったのか、わかってあげられなかったんだ」

バクのおんなのこは、バクにかたつむりのからを返しました。



「たとえわかってあげられなかったとしても、  
あなたがいっしょにいたことは、  
かたつむりさんにとってうれしいことだったと思うわ」  
「ほんとうに？」  
バクはおもわずききかえました。

「ええ。だれでも、ともだちが  
つらいことかなしいことをわかろうとしてくれて、  
いっしょにいてくれたらうれしいもの」  
バクは夜空をみあげました。  
かたつむりといっしょにみたときと同じように、  
星はきらきらとうつくしくひかっています。

バクのおんなのこもバクのとなりで星をながめていましたが、しばらくしてから言いました。

「あなたさえよければ、これからいっしょにたびをしましょう。  
そのうちあなたにもわかるでしょう」  
こうして、バクはバクのおんなのこといっしょにたびをすることになりました。

2ひきはとても遠くまでいっしょに歩きました。  
おなかがすくと、だれかのわるい夢をみつけて、はんぶんずついっしょにたべました。

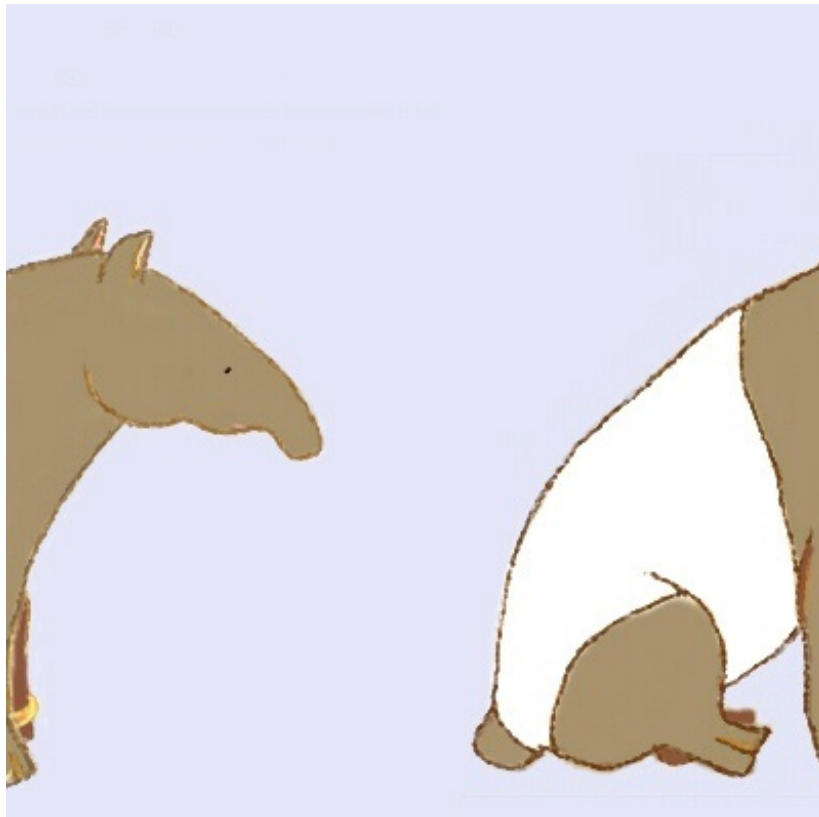
それからとてもたくさんおしゃべりをしました。

バクのおんなのこは、バクの知らなかったことをたくさん教えてくれました。  
バクも、かたつむりから教わったことをバクのおんなのこに教えました。

それでも、バクは、やっぱりときどきかたつむりのことを思いました。  
そしてかたつむりのからをとりだすと、さみしいきもちでながめました。

それから、どうしてかたつむりがあんなにかなしかったのか聞こえてこないかと、  
からを耳にあてました。

バクのおんなのこは、そんなバクをみてもなにもいいませんでした。  
ずっとバクのそばにいました。





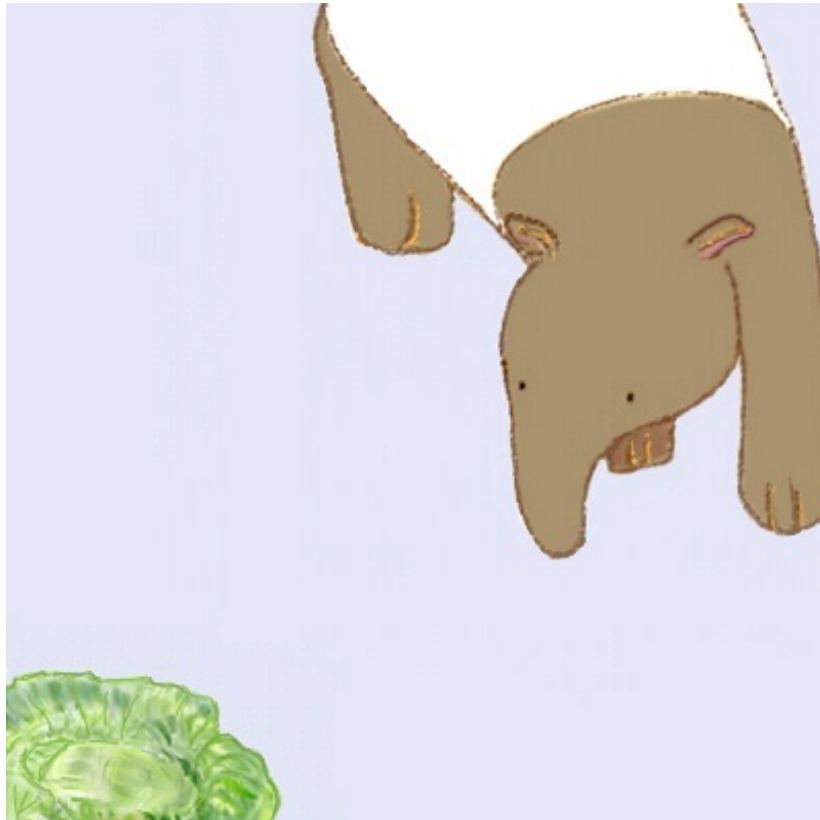
そして、ある星のあかるい夜のことです。

バクはとつぜん、バクのおんなのこの言ったことはほんとうだったと気づきました。

バクは、このはっけんをバクのおんなのこに話そうとしましたが、  
バクのおんなのこはもうねむってしまっていました。

そこで、バクは朝までまつことにして、それまでひとりでさんぼすることにしました。  
バクはしばらくぶらぶらとあるいていきました。

すると、バクとかたつむりがであったのにそっくりのキャベツ畑にでました。  
バクはそっと畑にはいると、キャベツをふまないようにきをつけながら、  
いちばん大きなキャベツをさがしました。



やっとみつけたいちばんりっぱなキャベツまで、  
かたつむりがかくれていたキャベツにそっくりでした。

ちがうのは、わるい夢をみているかたつむりがどこにもいないということだけです。

バクは、いつももちあるいているかたつむりのからをとりだしました。



どんなにかたつむりの話を聞いても、  
からに耳をすましても、  
バクにはかたつむりがどうしてかなしかったのかわかりませんでした。

そして、バクの話聞いてくれるバクのおんなのこにも、  
バクがかたつむりに会えなくてどんなにさみしいかはわからないのです。

バクのおんなのこはかたつむりに会ったことはないのですから、とうぜんです。

それでも、バクは、じぶんがかなしいときやさみしいときに、  
バクのおんなのこが話を聞いてくれて、  
そしていっしょにいてくれるだけで、うれしかったのです。

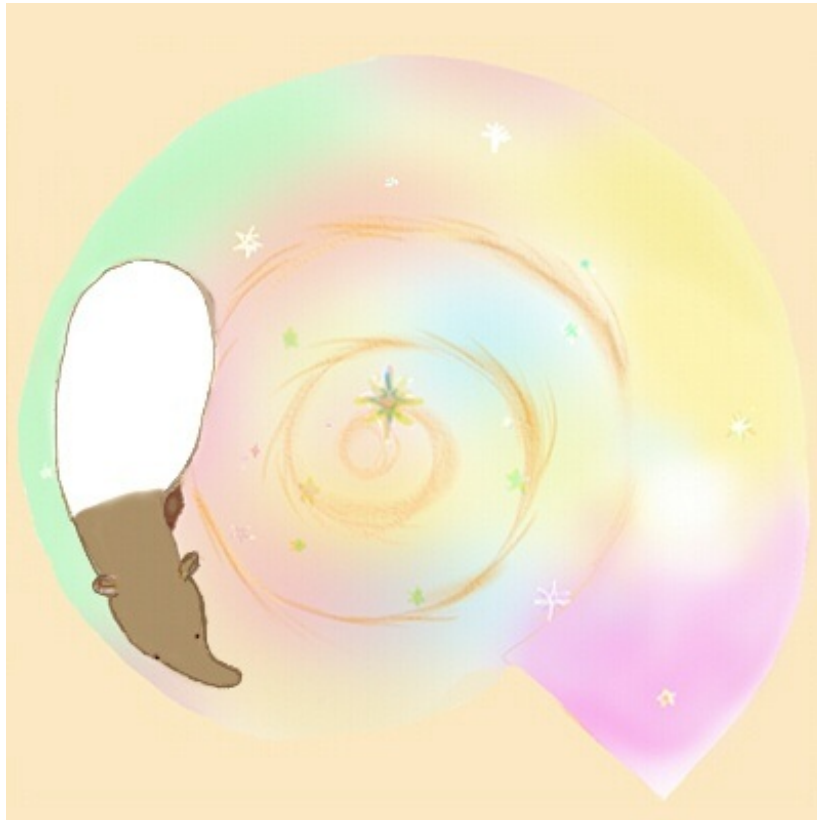
バクはさっきそれに気がついたのです。

そして、ばくは、かたつむりもそうだったならいいのに、と思いました。  
それから、きっとそうだったのだろう、と思いました。

どうしてかなしいのかわからなくても、バクはかたつむりのともだちだったからです。

もう、バクがかたつむりのからに耳をすますひつようはありませんでした。

バクは、かたつむりのからを大きなキャベツの葉っぱのかげにそっとおきました。  
そして、バクのおんなのこがめをさます前にもどるために、  
明るくなってきた空のしたをいそいで帰っていきました。



おしまい



ばくとかたつむり (シンプル版)

<http://p.booklog.jp/book/47197>

ぶん：立田 & え：きむろみ

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47197>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47197>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.